

小樽商工会議所港湾振興プロジェクト

小樽商工会議所

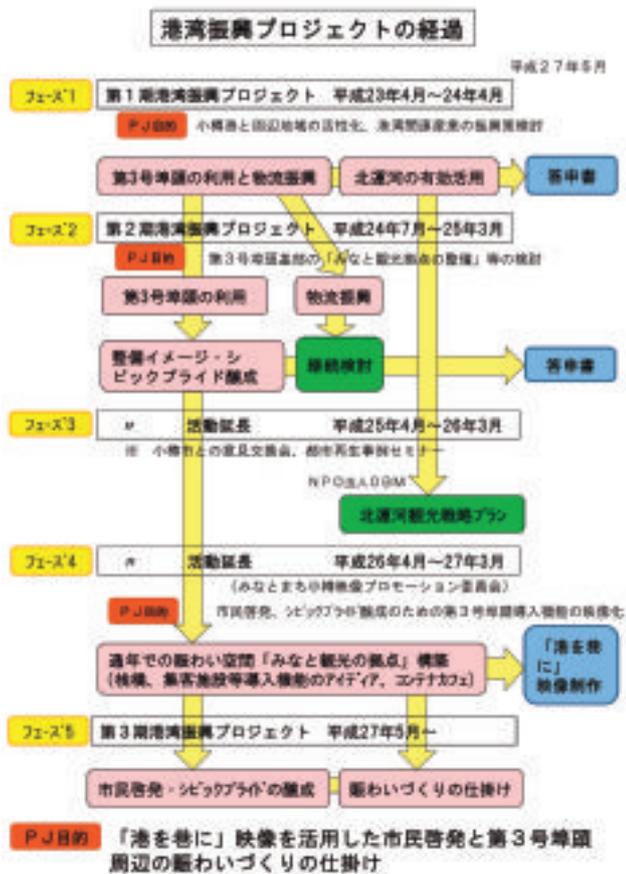
小樽商工会議所では、小樽市の急速な少子高齢化による人口減少を受けて、既存の地域中小企業の活力と街の活力を取り戻し、「まち」の将来を支える若年者の雇用の場の確保と環境づくりを推進するため、平成23年度から「1次・2次産業振興」「観光振興」「港湾振興」「商業振興」の4つのプロジェクトを発足、業種・産業間連携による相乗効果を誘発させるため各種経済振興活動を展開しています。

めるため、平成23年4月、第1期港湾振興プロジェクト（～平成24年4月）を発足、当所施策に反映させるための活動を開始しました。

プロジェクトでは、専門家からのアドバイスを受けながら小樽港を巡る現状と課題の抽出を行い、港湾物流の活性化や第3号ふ頭周辺の活用、市民の港利用、北運河・水路の利用、防災・減災への対応、耐震施設の整備、港内水質改善などに係る具体策や関係機関に対する意見・提言に分類して課題解決の方向性を整理しました。

港湾物流については、我が国における近年の港湾物流が極めて厳しい現状にあることを鑑みれば、小樽港単体で物流振興を図ることは少なくとも短期的には困難であり、小樽港が日本海側拠点港に選定されたことを契機とする第3号ふ頭周辺の活用と物流機能の向上を一体として検討することが現実的な対応であり、市民に伝わりやすいと考えました。

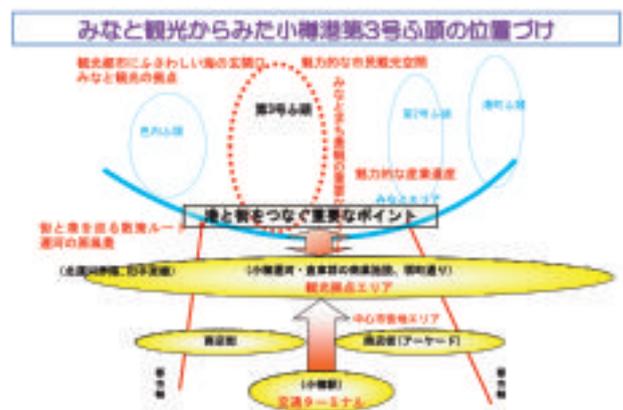
中でも、クルーズ船誘致成功による港湾施設整備の必要性や、観光客向け「小樽運河クルーズ」の運航開始（H24）、北運河地区の未利用石蔵施設の活用動向など、港湾地区再生の兆しが見え始めていたため、優先



今般、港湾振興プロジェクトの答申による小樽港第3号ふ頭基部及び周辺地区の活用を促し、新たな導入機能のアイデアとシビックプライドの醸成を目的としたプロモーション映像「港を巻に for our future」を制作しましたので、制作の背景と経過について紹介します。

小樽市は古くから商工港湾都市として北海道経済の中心的な役割を果たしてきましたが、物流の海上輸送から陸上輸送への移行、札幌への企業進出、流通形態の変化、産業構造の変化等によって小樽港の役割が著しく変化しています。

そのような中、当所では、小樽市の重要な社会資本である小樽港の物流振興を含めた今後の振興策をまと



すべき事項として「第3号ふ頭の利用と物流振興」と「北運河の有効利用」に絞った第1期プロジェクトの答申をまとめました。

先の答申を受けて、第2期港湾振興プロジェクト（平成24年7月～平成25年3月）では、第3号ふ頭は、JR小樽駅から至近距離にあり、市街地にも近くクルーズ船客のみならず、市民や観光客が真っ先に水に親しむ貴重な場所で、特に第3号ふ頭基部は、街の中心部や小樽運河、北運河地区との結節点となる位置にあり、観光資源としても高いポテンシャルを有するウォーターフロントの魅力の向上が喫緊の課題と捉え、また、小樽市では同時期、クルーズ船の誘致と第3号ふ頭周辺の施設整備を検討する「第3号ふ頭及び周辺再開発ワークショップ」を発足していたことを考え合わせ、第3号ふ頭基部に重点を置いた「みなと観光拠点の整備」と「大型客船受入環境の整備」をプロジェクトのテーマとしました。

現在の第3号ふ頭基部は、市民や観光客を迎える環境がないばかりかSOLAS条約によって埠頭への立入禁止措置がとられ、気軽に足を運び楽しめる空間になっていないため、「みなとまち小樽」の顔となる親水空間の構築を優先した具体的な整備イメージと市民喚起のためのシビックプライドの醸成を図るプレゼンテーションの必要性を第2期プロジェクトの答申にまとめました。

社会経済環境すべてが縮小、疲弊し続ける小樽市のこれからの活性化を担うエリアとして第3号ふ頭基部を「海とまちをつなぐ通年で賑わいの空間」として、多くの観光客が訪れている小樽運河と歴史的建造物が多く残り、運河の原風景を残す北運河地区一体を親水空間として形成すべく第3号ふ頭周辺への導入機能のアイデアをさまざまな機会を通じて市民の認知・関心を促し「自分たちのこと」としてシビックプライドの喚起と市外への都市プロモーションとしての役割を担うよう「港を巷に for our future」を制作しました。

映像について

市民に港への関心を寄せてもらうため、小樽の「まち」を紹介するプロモーション映像に、第3号ふ頭基部の整備イメージをコンピュータグラフィックで表現、特に、第3号ふ頭基部の港内に浮かぶ親水カフェのアイデアは港を訪れた際に真っ先に港町の風情に触れられる重要な機能と位置付けました。また、小樽港は物流の拠点であると同時に貴重な観光資源としてもポテンシャルが高く、通年で賑わいのある空間への導入機

能として、港の景観と港からの景観を楽しむ施設や流通港湾としての原風景の保存、多彩なイベント開催を可能とする施設、海上観光活性化のための施設、交通アクセス拠点や海上遊歩道をゾーニングして配置、さらに、映像には移動可能な廃コンテナを再利用したコンテナカフェを表現、オリジナルの楽曲を織り交ぜ、12分間の映像にまとめました。



映像のストーリー

映像は、これからの市民啓発活動に視点を置き、より共感を得るためストーリー性を持たせました。

小樽のカフェに就職を決めたカメラが趣味の女の子が、父親からプレゼントされたカメラで小樽の風景を撮影中、「ここにこんな施設があったら素敵なのになあ」との思いが次々と写真に映し出され、カタチを現実にするためには、自分たちの「まち」に対する想いを、自ら行動に移して「まち」を変えていく、そういった市民へのメッセージを込めました。

当所では、港の賑わいづくりに向けた具体的なアクションとして、廃コンテナを利用したコンテナカフェの社会実験を企画しているほか、第3号ふ頭基部を「みなと観光の拠点」として早期整備されるよう関係機関に働きかけて参りますので、関係機関の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。